

経験していない世代に いかに伝えるか



消防大学校長 満田 誉

1月1日付けで消防大学校長を拜命しました。よろしくお願いたします。

世代の違いを意識したのは、もう10年以上も前。ある県で地方空港業務の責任者だったときです。乗ったことのある航空機の話になり、L-1011（トライスター）をあげたところ、課員には搭乗経験者ゼロ。日本、特に地方のジェット機化・大型化を支え航空史に残る重要な機材であるとか、ロッキード社が製造した高性能で小粋な3発機と説明しても、まったくぴんとこない顔をされました。10年一世代と勘定するなら、まさに一世代違うかどうかの方々でも、共通の経験がなければ理解を得にくいのだと感じました。

では、今、一般の20歳代の方に、「池之坊満月城」「千日デパートビル」「北陸トンネル」「静岡駅前地下街」という4つの単語から何を連想するか聞いてみても、おそらく正解率は低いでしょう。こうした大火災の多くは、当時、テレビで生中継され、筆者の場合、恐怖とともに記憶に刻まれています。が、そうでない方々には、災害史という知識でしかないのです。

昨年は高齢者グループホーム、有床診療所や花火大会で火災が発生し、それへの対策を講じているところで、今も日常のあらゆる場面は火災や災害のリスクにさらされていることは銘記しなければならないのですが、消防に従事する皆様のお力で、安全のための基準や設備をひとつひとつ積み上げ（ハード面）、違反是正指導・防火管理体制等運用面でも不断の努力をしてきたこと（ソフト面）により、安全が確保されてきていることも事実です。そして若い世代の方々が増えるにつれ、上記のような大火災の事例について経験や感覚を共有することが難しくなっていることも事実です。

そこで、再現した火災現場を体験していただき、そこでベテランの経験を伝え、ひいては大火災についても各自考察してもらおうという、「伝える努力」をしていかなければならないと考えます。本紙の「消防大学だより」の欄でも何回か取り上げましたが、消防大学では平成25年度から実火災体験型訓練（ホット・トレーニング）を導入しました。これは、学校の一角にコンテナ等から成る施設を設置し、その内部で木製パレット（木くず）を燃焼させ、実火災を体験する訓練です。全国ではまだ導入事例が少ない（東京消防庁と2県）施設です。研修生はコンテナ内に進入しますが、防火衣等を完全着装し空気呼吸器を背負って進入します。内容としてはまず、コンテナ外での注水訓練があります。燃焼室の温度を確認する訓練（環境測定注水）、フラッシュオーバー発生を回避し、また脱出時間をかせぐための注水訓練（スポット注水）、フラッシュオーバー発生を回避するための注水訓練（ペンシリング）を行います。次に、コンテナ内部での訓練です。熱気の体験、中性帯の発生までの確認、フラッシュオーバー発生直前の現象（ロールオーバー）の確認、そして中性帯を崩したときどうなるかの体験等を行います。

消防大学は、これからも研修を充実強化し、「伝える努力」をしてまいります。どうぞよろしくお願いたします。